HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	障害を持って生きるクライエントを支援する作業療法士の専門職アイデンティティの構造［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	髙島, 理沙
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(看護学)
Dissertation Number	甲第11122号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53847
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Risa_Takashima_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（看護学）　　氏名：髙　島　理　沙

審査委員	主査　教授	傳　田　健　三
	副査　教授	八　田　達　夫
	副査　教授	良　村　貞　子
	副査　教授	佐　伯　和　子

学位論文題名

障害を持って生きるクライエントを支援する作業療法士の専門職アイデンティティの構造

作業療法士とは、医師の指示のもと作業療法を行うリハビリテーション専門職の一つである。年齢や性別を問わず、疾患や障害によって生活に何らかの困難が生じる様々な人々が作業療法を利用する。リハビリテーションの目的は心身機能の回復訓練というイメージが強いが、実際にはそれだけに留まらず、クライエント（CL）の主体的な活動と参加を援助することにあるとする考えが強くなっている。しかしながら、特に身体障害領域において、作業療法の目的を運動機能の改善、上肢機能の改善、起居動作の改善といった運動機能の改善とする考えが存在することも事実である。したがって、作業療法士の専門職アイデンティティの構造を検討することは重要な課題である。

本論文では、第1にCLの視点に立って、「身体に障害を持って生きるCLの運動の意味」を理解しようと試みた。第2に作業療法士の立場に立って、「現場で働く作業療法士が有する専門職アイデンティティ」を検討した。第3に上記2つの研究の総括を行った。その結果、作業療法士の専門職アイデンティティとして、Ⅰ．障害特性とCLの生活との融合とⅡ．果たすべき使命としてのCL主権という2つのコアカテゴリが抽出された。さらに、各参加者の専門職アイデンティティの内的構造には、Ⅰ．障害特性とCLの生活との融合・優位型、Ⅱ．果たすべき使命としてのCL主権・優位型、Ⅰ・Ⅱ併存型という3つのパターンが抽出された。検討の結果、専門職アイデンティティの理想的な内的構造は、Ⅰ優位型とⅡ優位型との強みを包括的に兼ね揃えたⅠ・Ⅱ併存型であると結論づけた。その内容はわが国で初めて作業療法士の専門職アイデンティティの構造を分析した研究であり、きわめて重要な論文である。

第1章の「身体に障害を持って生きるクライエントの運動の意味」に関する研究では、身体的な現象に留まらないCLの視点から見た運動の意味を、CLが片麻痺を有しながら生きる姿勢や困難、苦悩の経験から理解しようと試みた。片麻痺を有する18名の研究参加者に個別インタビューを行った。その結果、参加者の片麻痺に起因した運動変化の経験は、以前の自分との相

違として次の 7 テーマで表された：〈不可避の依存〉、〈無能な感覚〉、〈自律無視の他律〉、〈逸脱の象徴〉、〈甘えの許可証〉、〈人間の優劣の指標〉、〈努力の証〉。作業療法士が実存的に CL の経験を理解、解釈することで、CL が障害を持ちながら生きていく姿勢に寄り添った作業療法実践が促進される。

第 2 章の「現場で働く作業療法士が有する専門職アイデンティティ」に関する研究では、経験年数 7～27 年目の作業療法士 22 名が研究参加者となり、専門職アイデンティティの実感や作業療法士の独自性、専門価値、他者からの認識に関して個別インタビューを行った。その結果、参加者の専門職アイデンティティとして、Ⅰ．障害特性と CL の生活との融合とⅡ．果たすべき使命としての CL 主権という 2 つのコアカテゴリが抽出された。さらに、各参加者の専門職アイデンティティの内的構造には、Ⅰ．障害特性と CL の生活との融合・優位型、Ⅱ．果たすべき使命としての CL 主権・優位型、Ⅰ・Ⅱ併存型という 3 つのパターンが抽出された。

第 3 章では、上記 2 つの研究の総括を述べた。研究者が、片麻痺を有することになった CL の経験の語りからテーマを抽出したプロセスは、CL を実存的に理解するとはどういうことなのかを具体的に示した例とも言える。一方で、作業療法士が自身のアイデンティティの中に、コアカテゴリⅠで表される身体的、心理的、社会的な視点だけでなく、コアカテゴリⅡで表される実存的な視点も持っていたことが示されたことは意義深い。医療や福祉の現場において、実存的な観点からの実践は、作業療法士にとって重要な専門性になり得る。ただし、専門職アイデンティティの理想的な内的構造は、Ⅰ優位型とⅡ優位型との強みを包括的に兼ね揃えたⅠ・Ⅱ併存型であると考えられた。

最後に、作業療法士が理想的なⅠ・Ⅱ併存型の内的構造を持つ専門職アイデンティティを形成し、安定させることを援助するためには、その形成プロセスを明らかにする必要がある。その際、CL と作業療法士とその相互作用、およびそのコンテクストの全てを切り離すことなく一つの塊として捉え、そこで生じている現象を明らかにしていくことが今後の課題である。

以上のことから、著者は障害を持って生きるクライエントを支援する作業療法士の専門職アイデンティティの構造について、わが国で初めて詳細な検討を行い、新知見を得たものであり、作業療法士が理想的な専門職アイデンティティを形成し、安定させる上できわめて重要な意味をもつといえる。さらにこの専門職アイデンティティは医療専門職全般に普遍化できるものであり、医療全体に貢献すること大なるものがある。

よって著者は、北海道大学博士（看護学）の学位を授与される資格があるものと認める。